

雪でみがく窓　その部屋のみどりからイエスは離^{さか}りニーチェは離る
不可知といふ予感はあるかに烟らせて研究室にかをる煙草は
友よぼくはここを動けぬデラシネだ腐る華麗な知恵の死体だ
ヘルミーネ、何越えたくてぼくは会ふその夕暮れの痛き笑ひに
月沈む研究室の格子窓めざむれば独房のごときよ
鶏頭のまぼろし見ゆと告ぐるとき静かなる火をわれは継ぐべし
ユリシーズほど巧妙でないにせよ朝は来ぬ濃き髭面をして
青乙女なぜなぜ青いぼうぼうと息ふきかけて春菊を食ふ
アポロンやその弓よりも弦よりもはげしく撓ふ夜々の草花
根津駅の雪の階段のぼりつめ鉄砲坂で夕暮れに遇ふ
籠に飼へぬ頼家螢と吾がことを呼びし母はや呼ばぬ父はや
聖霊にちかづく午後をゆつたりと河豚料理野は目覚めゆくなり
五本づつ脚わかちあひ食ふときのたらば蟹の目あはれむごとし
耳といふ薄きつめたき肉にまでわが愛憎はゆきわたりたる
追ひつけぬ予感が春の九十九折り先に林檎を食む人きみは
水族館^{アカリウム}にタカアシガニを見てあしはいつか誰かの子を生む器^{うつは}
橋桁に縄からまりて垂^{さが}りたりわがうぶすなは西方にあり
尽きせざる都の黒き水の上を二十二歳の翁はわたる
饒舌な闇のかたへに捨てられし蝙蝠傘^{かづもり}くろき花をひらきぬ
滅びざる種はあらざれば人心は科学に劣ると思ひし部屋よ
アベルにもありし荒^{くわ}の夜なべて世に好まるることすこしつまらなき
月天心いづこか君がざんばらの髪を湯にとく湯はわが潮^{うしほ}

つつしみて傷なき午後に思ふときガリレオ^{II}ガリレイの額はくらし
言ひ終へて言ひきらざるを悲しみぬ冬の江戸川ただにみなぎる
穂高・槍はるかに見つつこれよりは急^せくほかはなき梓の水よ
揺れ揺るる梓川こそさびしけれどこへ行くとも夏の果てなり
波ひくき川なれど疾^とし梓川父を超えねば生くるあたはず
ここまででは表裏なき生ならむ乗鞍の松に遭ひて別るる
見上ぐれば狂^ふれよとばかり山澄みていやおうも無しわれは立たさる
這松は雪をつかみてひそかなり声なきものはいかに狂はむ
禁欲は強欲ゆゑにくづれざり闇よりも濃きおのれ眠らす
夏の花赤大輪にあらねども散れよと見ればしづかに散れり
なかぞらにひとつ悲しみは返すべしつばめ涼しき伊勢風^{かぜのみや}
おもむろに葡萄ひとふさ切りて去る手を待つごとし明日を思ふは
たはむれに妻あやめたる三島宿^{じゅく}喧嘩次郎兵衛はさびしく太る
もの言はず満山紅葉なだれゆけここ明暗の暗のはじまり
破魔矢にもしづかなる魔は宿りつつ今生ぞ濃き小春日和よ
もの言へばことごとく吾^あは貧しかり天の山羊座ぞさまよふごとき
生きいそぐ一語はげしきラボの椅子喜連川^{きつれがは}博士われを非難す
樹にたわわ蜜柑はみのりしづけさや父の地平を捨つるほかなし
父の白石わが黒石と置きかへともども崩す冬の夕陽よ
目にせまる一山の雨直^すなれば父は王将を動かしはじむ
歩道橋したたり落つるひさかたの春のひかりは撥音をもつ
小倉山に風はながれてゐたりけりわが見るなべては散りゆかぬかも

分身のごとき憎しみ出づるまで背中あはせに春はふかみぬ
背ぬくきあづまをとめは物言はずはこべら持ちて遊ぶなりけり
谷揺りて湧く万緑のひとつなる首重の松われは別れき
ゆつくりと獅子のまなこは開きたり氷りてしづむ天涯の碧^{あを}
獅子の身の一頭伏して雲うごく真日^{まひな}中の心ものを思はず
わき出づるうすら若葉に咳きこみて吾^あが統一はひくく破るる
蟻穴を純一の蟻つづき出でて春はも寒し昼の月浮く
雲底のまたき平^{たいら}を目はたどる暗しや女^{ひと}をむさぼりかねつ
二つ三つかみそりの傷ほの紅^{あか}きわれはしづかな破戒僧なり
霧島はひかりの花を落すとぞひた落すとぞさらばファウスト
長男は死ねざれば悲しやうやくに朝明けはきて槐を照らす
あえかなる光はらひて気多の山の蜘蛛を落せりわが手の指は
風やめば能登金剛の松もみな首をゆるめて憩ひてをらむ
目を閉ぢて川中に立つわが素足しづかに夏の流れを乱す
一献はのみどを降^おりてふたたびを燃えのぼりきぬ我たわいなし
山上に耶蘇ありし日を忘れざれど死すべきものを恐れやまざり
カインの徒ひそかに水をすくひをり刃のごとひかる休屋の水
火の色の蜻蛉^{あきつ}ばかりが飛ぶ岸に鶺鴒^つゐるはをとめのごとし
美しき暴力としてわれは飼ふ冬のアメリカカ＜声＞のアメリカ
おもむろに十六^{いざ}夜月^{よひ}は雲を乱しをり悲運てふ死語をわれは忘れよ
命ふかき鶏卵をわれは打ちて捨つ無言なるものなべて許さず
クローンとして幾^{いく}十^そ度^た生かさるる美少女を暗き心におもふ
コンピューター終^{つひ}の徒勞と言ふわれは異教徒ならむ研^ら究室^ぶを出できつ

わが命ややぬるき日を楽しまむくれなゐの腹見せて鳥鳴く

街灯のぐらりと重きあかるさに歩み近づけりわれはふたたび

風たかき白桃はくたうの園をぬけ出ててかうかうと我をいつはるのみぞ

白猫のうつくしき毛の濡れたるを引き寄せて春のひと夜をあそぶ

うしろより首を抱きてひたにひたに白鳥の首を洗ひたかりき

優生ユゼニクス学的愛恋といふ造語笑ひつつすぐす夜もゆるすべし

八長調よりの変位のみだらなる愉しさへ日々君をいざなふ

桃ひとつ宇宙に浮きてさはさはとモンズーのごときものを吹かしむ

火の果てしソドムのながきながき夜を燃ゆるソドムの吾が恋ふるなり

われを知るや大銀杏切る大男悠々として言葉なく笑む

マンハッタン見たしひたぶる笑ひたし醜き大和言葉を捨てて

ウラヌスの殺さるる血のゆたかさを思へり黄なる夕空の海

科学者も科学も人をほろぼさぬ十九世紀をわが嘲笑す